

物語型コミュニケーションの態度変容効果の生態学的妥当性に関する実証研究

高橋 祐貴¹・川端 祐一郎²・宮川 愛由³・藤井 聡⁴

¹正会員 国土交通省 (〒100-8918 東京都千代田区霞が関2-1-3)
E-mail: takahashi-y8311@mlit.go.jp

²正会員 京都大学大学院助教 工学研究科都市社会工学専攻 (〒615-8540 京都市西京区京都大学桂4)
E-mail: kawabata.yuichiro@trans.kuciv.kyoto-u.ac.jp

³正会員 京都大学特任准教授 レジリエンス実践ユニット (〒615-8540 京都市西京区京都大学桂4)
E-mail: miyakawa@trans.kuciv.kyoto-u.ac.jp

⁴正会員 京都大学大学院教授 工学研究科都市社会工学専攻 (〒615-8540 京都市西京区京都大学桂4)
E-mail: fujii@trans.kuciv.kyoto-u.ac.jp

現在の日本では、デフレや大規模自然災害のように公共的に取り組むべき様々な問題が生じており、それらを解決し、人々の長期的・広域的な便益を増進させるための公共政策が必要とされている。既往研究において、公共政策を計画・実施する上で不可欠となる「合意形成」のプロセスに、物語型コミュニケーションを用いた態度変容方略が有効であるとの知見が実証的に確認されつつある。ただし現在までのところ、実験用に作成された少数の物語シナリオを刺激として用いた検証に留まっており、生態学的妥当性が確保されたとは言い難い。そこで本研究では、実社会で用いられている新聞記事を実験材料として用いて改めて物語型コミュニケーションの効果検証を試み、物語型コミュニケーションがもたらす態度変容効果の生態学的妥当性が一定程度確認された。

Key Words : *narrative, consensus building, communication, public policy*

1. 背景・目的

現在の日本では、20年以上続くデフレーションや東日本大震災に代表されるような大規模自然災害への対策といった、公共的に取り組むべき問題が様々な生じており、そのような公共的問題を解決するため、様々な公共政策が計画・実施されている¹⁾。公共政策は、主として国や地方自治体などの行政組織によって行われ、人々の長期的、広域的な便益を増進させるために大きな役割を果たしている。

公共政策の遂行にあたっては、その政策が公共的な問題解決の手法として適切であるか十分に吟味する必要がある。政策の立案は、高度な知識を有する専門家等による十分な議論のもとに行われる必要があることは論を俟たない²⁾。また、公共政策は社会の共有リソースを投入して実施されるものであることから、専門的知見からの判断をもとに、人々の「合意」を形成する活動がしばしば求められる。公共的な問題の解決を目指すプロジェクトは大規模かつ長期間の取り組みとなることも多く、多

数の利害関係者の対立を調整し、継続的に総意を得ることは容易ではない。また、社会情勢の変化が公共政策に対する「合意」に影響を与え、政策の内容が変化していないにも拘らず人々の認識に変化が生じ、事業が円滑に行われなくなる恐れもある。実際に、1952年から計画されていた八ツ場ダム建設は、2009年の政権交代によって誕生した政権与党の「コンクリートから人へ」というスローガンの下でその事業の中止が表明された経緯がある³⁾。

合意形成を阻害する要因としては、公共政策を行うことで社会全体の便益が増進し結果として個人の便益の増進に繋がるという政策の意義への無理解や、政策の是非を吟味することなく、特定のイデオロギーなどに支配され政策に対する賛否を形成していることなどが挙げられる。また、社会全体としての合理性と各参加主体にとっての合理性が一致しない「社会的ジレンマ」的状况が往々にして存在し、状況が混沌としていてジレンマそのものを明晰に表現しきれないような場合も珍しくないものと考えられる⁴⁾。そのような状況下で合意を形

成するためには、例えば各参加主体が他人の立場を想像すること、政策の（自己にとっての利害得失ではなく）公共的意義をリアリティあるものとして実感すること、社会が今後どのような筋道を辿るのかについて時間軸を持ったシナリオを共有することなどが重要になると考えられる⁵⁾。

そして、合意形成において重要な「他者の立場の想像」や、政策意義の「リアリティある実感」などに「物語型コミュニケーション」が有効である可能性が指摘されている⁵⁾⁶⁾⁷⁾。物語形式の文章や映像などを使用して行われるコミュニケーションにより、主題に対する関心の向上や、物語の趣旨に沿う方向への説得的効果が得られることが既往研究において明らかにされている。

物語研究とは、主として 1970 年代以降、心理学、社会学、医療などの分野で進められてきたものである。心理学者の Bruner は人間の認知の根幹に「物語モード」という思考様式が存在し、人間が何かにありありとしたリアリティを感じる心理作用は、この物語モードに拠っていると指摘した⁸⁾。また、Green & Brock⁹⁾によって、物語世界への移入が人々の態度変容を促すことが明らかにされている。ここで、移入とは「自分の現在いる場所や時間を忘れて物語のなかで生じている出来事に没頭する」ことである。さらに、上述のような物語接触の説得的影響を、公共政策における合意形成に向けたコミュニケーションに活用するための理論的考察が川端・藤井⁷⁾や長谷川ら¹⁰⁾によっておこなわれている。ここでは、より円滑に合意を形成するための方法論として、政策情報を物語化して伝達するという手法が考案されている。さらに、政策情報の物語形式の情報提示の有効性を定量的に明らかにするための研究も行われている⁹⁾。高橋らにおいては、高知県黒潮町における防災政策を物語的に記述したシナリオと、説明的に記述したシナリオを作成し両シナリオによる「登場人物への評価」、「納得性」、「関心向上性」、「自我関与性」などの読了効果を測定し、政策情報の物語化が人々の態度変容を促すことに有効であることを明らかにしている⁹⁾。上記のような検証においては、移入を促進する物語的な文章形式の特徴に関する考察も行われており、「時間性」「主体意図性」に関する表現を強調し、主人公が困難な目標を達成するまでの出来事を描いた「目標達成—英雄物語型プロット」に沿っていることが、態度変容を促す上で有効な物語の特徴であると指摘されている⁹⁾。ただし、以上の実験で用いられたシナリオはいずれも実験目的のために作成されたものであり、当該実験から得られた知見の生態学的妥当性は十分確認されていない。なお生態学的妥当性 (ecological validity) とは主に心理学の領域で用いられる概念で、限定的な条件下での実験により得られた知見が、より広い現実的な文脈においても心理現象や社会現象を

説明する力を持つか否かを意味する。

また、物語に触れると移入が促され、態度変容が生じるという心理プロセスの存在は示唆されているものの、具体的にどのような文章特性が要因となって移入が促進され得るのか、という点については、十分な検証が為されているわけではない。

そこで本研究では、現実社会で用いられている文章として「新聞記事」を実験材料に用い、あらためて物語型コミュニケーションの有効性を検証する。新聞記事は実験用に作成された文章ではなく、現実社会で自然な言語表現として用いられているものであるから、このことにより、物語型コミュニケーションが有効であるという知見の生態学的妥当性が高まる可能性がある。また、あわせて、移入を引き起こし易い文章表現や構造についての検証も行う。これらの検証を通じて、物語型コミュニケーションを実務的に利用する上で活用可能な知見を提供し、より良い社会的合意形成に資することが本研究の目的である。

なお、本研究はあくまで新聞記事の読後感に与える影響の分析であるため、「コミュニケーション」という行動のごく一部を扱っているものである点には留意が必要である。また、新聞記事の読後感の変化が、持続的かつ広範な意味での態度変容につながるか否かは別途検討が必要である点にも留意が必要である。

2. 既往研究と本研究の位置づけ

本章では、物語の特徴や物語型コミュニケーションの効果、物語の公共政策への応用に関する既往研究の整理を行い、本研究の位置づけを示す。

(1) 物語の特徴に言及した既往研究

a) 物語の形式的な定義

物語の定義については、様々な見解が示されている。例えば、野口¹¹⁾は、物語の最小限の要件を「複数の出来事が時間軸上に並べられている」ことであるとしている。他にも、物語の最小限の共通要素は「少なくとも二つの状態と、最初の状態から次の状態へ移行するという一つのイベント」であると指摘されていたり¹²⁾、物語とは「経験を再現するための言語的な技術の一つであり、とりわけその経験の時系列に適合するように言葉を組み立てる技術」であるという指摘もなされている¹³⁾。出来事の時間軸に基づく配列についての考察は古くから行われており、例えば、アリストテレス¹⁴⁾は、悲劇を「一定の大きさをそなえた完結した一つの全体としての行為の再現である」と定義しており、この全体とは物語の「初め、中間、終わり」という時間軸に沿った構造のことを指している。

以上のように物語を時間的秩序で定義する例は多い。一方で、時間軸や時間秩序を前提とせず、文章の持つ意味に着目した特徴づけも行われている。やまだ¹⁵⁾は、物語は「2つ以上の出来事をむすびつけて筋立てる行為」としており、さらに「経験の組織化、そして、それを意味づける『意味の行為』が『物語』と呼ばれるようになる」と述べている。このことから、物語とは、出来事を結びつけ組織化し意味づけたものであるとみなすことができる。

上記の時間に注目した定義と意味に注目した定義を併せ持つものとしては、Hinchman & Hinchman¹⁶⁾の、物語は「出来事を、意味に満ちたやり方で結びつける明確な時系列を持ち、一定の聴き手に対して、世界の存在や人々の経験についての洞察を提示するような言説」であるという定義がある。この定義に従った場合、年代史や歴代誌のように時間軸に沿って何が起きたかを述べているだけでイベント間の関連、流れを示していないものは、厳密な意味での物語とはみなせないと考えられる。

また、文章の構造から物語の特徴付けを行った研究も存在する。Labov & Waletzky¹⁷⁾は、物語を「経験を要約する言語表現手法であり、特にその経験の時系列に沿って構成する手法」であると指摘しているが、物語に共通する構成要素として、「1: Abstract, 2: Orientation, 3: Complicating Action, 4: Evaluation, 5: Resolution, 6: Coda」の6つを挙げている。Thomdyke¹⁸⁾は、物語に共通する要素が存在するというLabov & Waletzkyの考え方を基に、ストーリー・グラマー理論を提唱した。ストーリー・グラマーとは、おとぎ話から人々の日常の語りに至るまで、多くの物語には必須の構成要素や配列方法などの共通の規則のことである。実際に、昔話・神話・童話などの文章の構造分析に基づき、それらのプロットがある規則に従って展開されていることが指摘されている¹⁹⁾。そして、ストーリー・グラマー理論は、このような規則に沿った文章はそうでない文章に比べて、理解や記憶を向上させるものであると主張するものであり、Thomdykeは実験においてそのことを確認している。同じく物語の構造に着目した研究として、Campbellの神話の分析が挙げられる²⁰⁾。Campbellは、多くの神話が、英雄的な主人公が使命感に駆られ困難に立ち向かい目標を達成するという一連の出来事が「旅立ち、イニシエーション（通過儀礼）、帰還」という構造に沿って描かれたものであると指摘している。

b) 人間の認知能力と関わる物語の特徴

Brunerは、人間が何ごとかにリアリティを感じる時、そのリアリティは基本的に物語として形成されているのだと指摘している。Brunerによれば、人間の認知能力は互いに還元不可能な二つの思考様式に分かれているとされ⁸⁾。一つは論理-科学的思考様式（以後、「論理科学モ

ード」と呼ぶ）であり、「良い理論、簡潔な分析、論理的証明、妥当な議論、理路整然とした仮説に導かれた経験的発見」をもたらすとされている。もう一つは、物語様式（以後、「物語モード」と呼ぶ）であり、このモードにおいて人間は「みごとなストーリー、人の心を引きつけるドラマ、（それが真実ではないとしても）信じるに足る歴史的説明」を経験するとされている。これら二つのモードはそれぞれに根源的なものであり、この二つのモードを併せ持つことで、私たちは世界を認識しているとされる。つまり物語とは、人間の心に対して、論理的な名証性とは異なるものとしての「リアリティ」を与えるような文章であると言える。

次に、テキストを理解する際に形成される表象と呼ばれる心的イメージから、物語の特徴づけを行う研究もなされている。

認知心理学の領域において、読者はテキストを読解する際に、表層的表象、テキストベース、状況モデルという3つの水準の表象を形成すると指摘されている²¹⁾。表層的表象とは単語や文法構造など文章を構成する表面的な情報から成る表象であり、テキストベースとは文章が示す命題構造の表象であり、状況モデルとはテキストに書かれた情報について読者の知識や推論を加味して形成される表象のことである。Kintsch²²⁾は、読者は状況モデルが構築できて初めて、テキストの内容について因果関係等含めた深い理解に到達できると指摘している。また、Zwaan²³⁾は、言語を理解することを、そこに記述された状況を実際の出来事のように体験することであるととし、文章理解には状況モデルの形成が重要であると指摘している。

状況モデルに関する理論はこれまで様々なものが提唱されている。代表的なものとしてはZwaan & Radvansky²⁴⁾のイベントインデックスモデルが挙げられる。このモデルでは、物語内容に関する5つの状況次元が設定されており、読者はそれぞれの5つの状況に関する情報を収集し、その次元を追うことで文章を理解していると仮定されている。その5つの状況とは、文章に記述された時間（以後、「時間性」）、空間（「空間性」）、出来事の因果関係（「因果性」）、登場人物（もしくは主人公、「主体性」）、目標（「意図性」）といった情報である。

この状況モデル理論に着目し、物語文と説明文の読解時の状況モデルの形成のされ方の違いを比較した研究も行われている。León & Peñalba²⁵⁾は、物語文と説明文における因果関係の働きに関する研究のレビューを行い、物語文においては「意図性」が重視され、説明文では「因果性」が重視されるとの考えを示している。井関・川崎²⁶⁾は、物語文の読解においては説明文の読解とは異なり、「意図性」が状況モデルの構築に大きく寄与して

いることを明らかにした。ただし、同実験において、物語文では、「意図性」だけでなく「因果性」も状況モデルの構築に大きく寄与していることを実証的に明らかにしている。その他の先行研究^{例えば27)、28)}では、物語文においては、他の四つの次元に比べて「空間性」が状況モデルの形成に有意な寄与を与えていないことを示している。この結果を踏まえ、井関・川崎²⁹⁾は物語文と説明文における「空間性」の機能の違いを検証し、物語文において、状況理解に対する「空間性」の及ぼす効果は「時間性」や「意図性」に比べて相対的に小さかったことを実証的に明らかにしている。

(2) コミュニケーションと物語に関する既往研究

a) 物語の社会的共有

物語が社会的に作られ共有されるものであるという特徴について、いくつかの指摘がなされている。

例えば、Elliot³³⁾は物語の本質的な特徴を、「1、時間性をもつ(chronological)、2、意味に満ちている(meaningful)、3、社会的に作られ共有される(social)」という3つの点にまとめている。また、Bruner³⁴⁾は、物語とは「語る者と語られる者の共同の産物である」と述べており、物語は社会的関係のなかから生まれ、社会的関係のなかで理解されるものと言える。そして、聴き手がいなければ物語は産出されないし、物語は聴き手に了解されて初めて意味を持つ存在になると指摘している。

物語が社会的に共有されることの意義として、例えばリケール³⁵⁾は「ミメシス(模倣、感染)」という概念を用いて物語の性質を考察し、物語の形で理解された他人の生・経験は共感や模倣を生みやすく、社会関係を形成していく上で物語の共有が有用であると指摘している。また、川端・藤井⁷⁾は、物語読解と視点取得(他人の立場に立つてものを考えること、あるいはその能力)の関連性に関する既往研究^{例えば36)}から、物語作品の読解や物語的コミュニケーションの実践が共同体の連帯を強化する可能性を指摘している。

b) 物語接触による態度変容に関する既往研究

物語に触れることにより、物語世界の情景を鮮明にイメージでき登場人物に強い共感を示し、物語世界の出来事をあたかも自分自身が実際に経験しているかのように感じる体験をすることがある。特に物語型テキストに触れることで読者の態度が変容するという点に着目した研究として、物語への移入(transportation into narrative)の研究が挙げられる^{例えば9)、37)、38)}。

Green & Brock⁹⁾は、物語に引き込まれているときに読者の心理は特殊な状態に移行しているというtransportation(移入)理論を唱えた。Greenらは物語への移入を「物語接触時に注意、想像、感情が、物語内で生じている出来事に統合的に融合されるプロセス」と定義

している。読者が移入している際には、物語内の出来事を想像するために読者の処理資源が使われ、物語世界への集中が増し現実場面のことが気にならなくなり、自分自身が物語世界に描かれていることを実際に経験しているように感じ、物語の内容に対して強い感情反応が生じやすくなるとされている。そして、Greenらは、移入を通じて態度変容が生じるということを実証的に示している^{9)、38)}。

物語型コミュニケーションの公共政策への応用を見据えた態度変容に関する実証研究としては、川端らと高橋らのものが挙げられる。川端ら⁵⁾は、リニア新幹線の整備計画を題材とした物語型/説明文型のシナリオをそれぞれ作成し、物語型コミュニケーションの効果の検証を行った。その結果、物語志向性(「自身の物語モードへの入りやすさ」や「物語的な説明の上手さ」などの能力)が高い人については、説明文型のシナリオを提示された群よりも物語型のシナリオを提示された群の方が、シナリオ読了効果が向上するという知見を得ている。高橋らは⁶⁾、高知県黒潮町における防災の取り組み⁵⁰⁾を題材とした物語型/説明文型のシナリオをそれぞれ作成し再度検証を行った。実験の結果、物語志向性の高低によらず、物語型のシナリオを提示された群は説明文型のシナリオを提示された群に比べて、シナリオの題材に対する関心や納得感が向上することを実証的に示している。

(3) 物語を用いた実践活動とその研究

a) ナラティブ・セラピーなど物語を用いた実践

物語を実践に応用した最も代表的な例として、臨床心理療法の分野において1990年代以降提唱されるようになった、「ナラティブ・セラピー」や「ナラティブ・ベイスド・メディシン(NBM)」が挙げられる⁴⁰⁾。ナラティブ・セラピーは、セラピストとクライアントが共同で物語としての自己を構成していく実践であり、セラピストとクライアントは対等な位置から対話を進め、これまで患者の心を支配していた物語(「ドミナントストーリー」と呼ぶ)とは異なる新たな物語(「オルタナティブストーリー」と呼ぶ)を生み出し、その物語によって新たな自己アイデンティティが生まれることで、クライアントの苦痛を解消させることがナラティブ・セラピーの目的である¹¹⁾。NBMは、従来の事実情報を提示することで患者の心理に変化を与えようとする「エビデンス・ベイスド・メディシン(Evidence Based Medicine, EBM)」に対して、心理学や社会学の知見を援用し、患者の語る「物語」に耳を傾け、会話を通じてその物語に医療従事者が入り込み、書き換えを支援することで医療行為における心理的な問題の解決を図るという手法である⁴¹⁾。これはつまり、患者の心に物語的に働きかけることで、思い込みが取り除かれ、より望ましい心理状態

になるということである。

この他にも、物語型の情報を用いた実践的な取り組みが、マーケティング、医療、教育など様々な分野で行われている^{例えば 42), 43), 44)}。

b) 物語型情報の公共政策への活用に関する既往研究

川端・藤井は、物語研究の系譜をレビューしたうえで、公共政策をめぐる意思決定や合意形成に物語型の情報が果たす役割・意義として次の四つを指摘している⁷⁾。

- 1) 物語は物事を他人に伝えるための根源的な情報形式の一つであり^{8), 34)}など、人々に政策の意義や必要性を、リアリティを持って伝達するには物語型のコミュニケーションが有効である可能性が考えられること。
- 2) 物語る行為は、想像のなかでシミュレーションを行う行為であり、将来のビジョンを描くことが重要な公共政策のプランニングにおいては物語に関する能力が重要であると考えられること。
- 3) 物語は共同体の連帯を強める可能性があり、共同体の連帯を強めることで公共政策を円滑に推進できる可能性が高まること^{45), 46)}。
- 4) 物語の「思いこみを取り除く」という効果を応用すれば、公共政策の推進を阻害し得る人々の「イデオロギー」や「偏見」を相対化でき、円滑な合意形成を行える可能性が高まること。

川端らの指摘を踏まえると、公共政策におけるコミュニケーション施策を効率的、効果的に行っていくために、物語型の情報が何らかの形で活用できるであろうことは、十分に想定されるところである。

藤井⁴⁷⁾は、公共計画の実践を考えた際には、公共計画に関する理論や技術の開発はもちろんのこと、そうした理論や技術を活用しながら実践しようとする「活力」が不在であれば公共計画が適切に推進されることはあり得ないと指摘しており、その「活力」を育むために物語の活用が重要、あるいは不可欠である可能性を論じている。

公共政策を推進するための「活力」を物語を用いた実践描写によって促すことを目指す研究も行われている。例えば、東日本大震災の直後に東北地方整備局が実行した、救援路確保のための道路啓開作業の過程を物語的に描写した研究が存在する⁴⁸⁾。また、澤崎ら⁴⁹⁾は川越市におけるまちづくりの成功事例を描出するにあたり、まちづくりに携わった関係者たちが抱いている街づくりの物語をインタビューにより収集し、さらにそこに分析者の視点から解釈を加えた上で全体として一つの物語に統合するというアプローチを採用している。また、佐藤ら⁵⁰⁾の行った高知県黒潮町における先進的な防災の取り組みの事例の物語描写研究は、他の自治体へ防災の取り組みの活力の伝染を期すものである。

加えて、藤井⁵¹⁾は、意思決定における物語の役割について次のように論じている。意思決定の場面において

「人々は、予め持っている物語の一貫性を保持する方向の選択肢が選択される傾向が強く、一貫性を破壊する方向の選択肢が選択される傾向が弱くなる、という傾向が強い」。このことから、人々の持つ自己物語が公共政策を阻害する要因となる可能性は十分に考えられる。

このような公共政策の推進を阻害するような自己物語を持つ人々に対するアプローチとして物語型コミュニケーションが有効である可能性が考えられる。既に述べたように物語接触による態度変容の理論研究は既に行われており^{例えば 9), 37), 38)}、また、ナラティブ・セラピーなどの実践からも、こうした阻害要因への対処に関する知見を得ることができるであろう。

(4) 本研究の位置づけ

以上のように物語に関する既往研究を概観すると、公共政策の合意形成においても物語型コミュニケーションの活用が有効であると考えられ、また実際に物語型情報を活用する取り組みが行われていることがわかる。

一方で 1 章でも述べたように、川端ら⁵⁾と高橋ら⁶⁾が行った検証により得られた、公共政策において物語型コミュニケーションが有効であるという知見は、いずれも実験用に作成された文章が刺激として用いられており、その知見の生態学的妥当性が十分に確認されたとは言い難く、その妥当性の検証を行うことは実務への応用を考える上で一つの重要な課題であると言える。

このような背景から、本研究では実社会で活用されている新聞記事を用いた実験を行い、人々の関心や納得感を高めるために物語型コミュニケーションが有効であるという知見の生態学的妥当性を高めることを目的とする。こうして得られた知見は、物語型コミュニケーションを実務的に活用するための知見を提供するものと期待される。物語コミュニケーションの応用可能性がより強く確認されることになれば、合意形成技法としての活用を加速させることにも繋がり得るであろう。

3. 新聞記事を用いた Web 実験概要

(1) 実験概要

本研究では物語型コミュニケーションの有効性を検証するにあたり、実際に社会で用いられている文章である新聞記事についてその物語性を事前に後述の方法で評価した上で、被験者に提示しその反応を計測する Web アンケート調査を行った。

本実験では、まず 36 本の新聞トップ記事を収集し、各記事から図表やキャプション等を削った 36 本のシナリオ作成した。そして、新聞記事の物語性を評価するために、新聞記事の各文について後述の方法でコーディングを行った。その上で、インターネット調査会社を通じ

た全国のモニター218名を対象とする Web アンケート調査の形式により、シナリオをモニターに提示してその反応を計測・分析した。アンケート調査では、初めに「個人属性」, 「社会問題への関心の程度」, 「物語志向性」を計測した。次に、36本の中から1本のシナリオを表示し新聞記事の読了を要請した。読了後、「移入度」, 「シナリオの難しさに関する質問」, 「シナリオ読了効果」を計測した。その後、36本の中から別の1本のシナリオを提示し、読了後に「移入度」, 「シナリオの難しさに関する質問」, 「シナリオ読了効果」を計測した。さらに別のシナリオでも同様の作業を行った。つまり、モニター1名に対し計3本のシナリオ読了を要請し、それぞれについて読了後の反応を計測したこととなる。

(2) シナリオの検討

a) 新聞記事の選定

実験に用いるシナリオの基となる新聞記事として、読売新聞朝刊、朝日新聞朝刊、毎日新聞朝刊の同一期間のトップ記事を採用した。

実験材料として新聞を用いたのは、新聞が広く実社会で用いられている情報媒体だからである。川端ら⁵⁾や高橋ら⁶⁾の実験で用いられたシナリオは、実験用に作成されたものであった。物語型の情報提示が人々の納得や関心を高めることに有効であるという知見の生態学的妥当性を検証するためには、広く社会的に用いられている自然な題材として新聞記事を用いることが有効であると考えた。

新聞のトップ記事は、記事ごとに物語性の強弱やトピックに幅があり比較研究に適している。また、新聞から題材を得ることで、比較用の複数のシナリオを比較的容易に準備できる。既往研究^{5) 6)}の実験では物語型・説明文型のシナリオをそれぞれ1種類ずつしか用いていなかったため、実験結果がシナリオの出来の巧拙に左右されている可能性を否定できない。もちろん多数の新聞記事を用いたとしても同様の可能性は排除しきれないが、相対的には抑制されると考えられる。

読売新聞朝刊、朝日新聞朝刊、毎日新聞朝刊を情報源としたのは、この3紙が2015年の日本における新聞の売上上位3紙であるためである³²⁾。

b) 収集方法

実験に用いるシナリオの基となる新聞記事を、なるべく恣意性を排除して収集するために、以下の様な条件で収集を行った。

期間は、2016年11月から過去1年間で、その中の毎月1日のトップ記事を収集した。収集した本数は、読売新聞朝刊、朝日新聞朝刊、毎日新聞朝刊それぞれ12本ずつの計36本となった。

c) 実験材料としての新聞記事のシナリオ

Web アンケートに用いるために、収集した新聞記事に次のような若干の処理を加えた。まず、新聞記事の見出し、本文、出典情報(例:「TPP 法案, 4日衆院通過 国会の成立, 濃厚 政府・与党方針」『朝日新聞』2016年11月1日, 朝刊)を文字データ化した。次に、今回の実験では文章の表現方法による読了効果への影響を分析の対象としているため、文章表現とは関係のない、図表およびそのキャプション、取材担当記者の表記(例:【ソウル=井上宗典】)、関連記事の紹介(例:▼4面=ISDS 条項を議論)を本文中から削除した。以上のような処理を、収集した36本の新聞記事すべてに対して行い、本実験で用いるシナリオとした。なお今回用いたシナリオについては、いずれの基となる新聞記事においても、本文に十分な内容が表現されており、図表等を削除したとしても読解に重大な支障はないと考えられる。

(3) 新聞記事の物語性の計測

本実験を行うに当たり、作成した36本のシナリオそれぞれについて、物語性を評価する必要がある。以下に、その評価方法を詳述する。

a) コーディング

本研究では、ある人間の発話や言説内容を分析する科学的手法として Ericsson & Simon によって提唱されたプロトコル分析³³⁾を参考にしつつ、以下の手順に従って、シナリオの各文に物語性が含まれるか否か、また、含まれているのならばその物語性は何に分類されるのかを分類した。

(ア) 分析対象となるシナリオについて、地の文は句点までを1単位としてプロトコルデータとした。発話文については、鍵括弧内の句点は無視し、原則鍵括弧が終わった後に最初に登場する句点までを1単位として扱ったが、鍵括弧単独で記載されており、その前後で改行されているものについては、鍵括弧を1単位とした。

(イ) 物語性を評価するための項目をリスト化した。

(ウ) 著者の高橋を含む分析者3名で、プロトコルデータの1つ1つについて、文法上の主語と述語、要素文の主語と述語、会話文の発話主の判別を行った。

(エ) (ウ)で判別した主語・発話主について分類を行い、各述語については「動作記述文」or「状況記述文」の判断を行った。

(オ) 「対立構造の有無」や「擬人法の有無」などの物語性評価項目に該当するかどうかの判断を行った。

(カ) 分析者の意見が割れた場合は、その都度意見が一致するまで協議を行った。

なお、文章特徴のコーディング項目は、後述するように発話者が明確であるか否かや、時間体験が描かれてい

るかなど、既往の物語研究における「物語の特徴」に関する議論を踏まえたものも含まれるが、本研究では探索的検討を行うため、必ずしも既往研究の知見と対応させることに拘らず、筆者らの判断で多様な観点からコーディング項目を選択した。

(4) コーディングにおける評価項目

a) 記事の特徴に関する項目

記事の特徴に関する評価項目としては次の4つである。

b) 記事の種類

収集した記事を、「意見主張記事」、「事実描写記事」、「事実に基づく意見主張記事」の3種類に分類した。

c) 文字数

見出しや、キャプションや取材担当記者の表記、関連記事の紹介などを除く本文の文字数をカウントした。

d) 文数

地の文の句点の数と前後を改行された発話（鍵括弧）の数の和を文数としてカウントした。

e) 記事のテーマ

収集した記事を、「経済」、「政治」、「社会」、「事故・災害」、「国際」の5種類に分類した。

f) 記事の特徴に関する評価項目による変数の構成

上述の、記事の特徴に関する評価項目から、説明変数を構成する。

まず、「記事の種類」に関する変数を構成する。記事の種類の分類を行った結果、「意見主張記事」に該当すると判断された新聞記事はなく、すべての新聞記事が「事実描写記事」あるいは「事実に基づく意見主張記事」に分類された。そこで、「事実描写記事」を1、「事実に基づく意見主張記事」を0とする「記事の種類ダミー」を構成した。次に、文字数と文数はそのまま変数として用いることとした。最後に、各新聞記事のトピックを「経済」「政治」「社会」「事故・災害」「国際」の5つに分類し、「テーマダミー01」は「経済」、「テーマダミー02」は「政治」、「テーマダミー03」は「社会」、「テーマダミー04」は「事故・災害」にそれぞれ該当すると判断した新聞記事を1、該当しなければ0とするダミー変数である。なお、「国際」に該当する新聞記事はすべてのテーマダミーを0として表す。以上より構成し

表-1 記事の特徴に関する評価項目

記事の性質	
5	記事の種類ダミー（事実描写記事:1, 事実に基づく意見主張記事:0）
6	文字数
7	文章数
8	テーマダミー01（経済:1, それ以外:0）
9	テーマダミー02（政治:1, それ以外:0）
10	テーマダミー03（社会:1, それ以外:0）
11	テーマダミー04（事故・災害:1, それ以外:0）

た変数を表-1に示す。

g) 文の主語・述語に基づいた評価項目

はじめに、各文の主語・述語の判定を行った。重文のように複数の述語が1文中に存在する場合には、便宜上文の最後に出てくる述語を文の述語として扱った。強調構文の場合、本来の並びで主語・述語の判断を行った。発話中（鍵括弧内）の述語についてはこの項目では取り扱わなかった。以下にその評価手順を示す。

まず、全ての文を、述語に基づき「動作記述」文と「状況記述」文に分類した。次に、「動作記述」文と「状況記述」文の主語を、「固有名詞（公的個人）」、「固有名詞（非公的個人）」、「固有名詞でない個人」、「固有名詞（公的組織・集団）」、「固有名詞（非公的組織・集団）」、「固有名詞でない組織・集団」、「曖昧な主語」、「固有名詞の無生物」、「固有名詞でない無生物」、「筆者」のいずれかに分類した。そして、該当する場合には「主語判断ダミー」に1を、該当しない場合には0をそれぞれ記入した。

上述の文の主語・述語に基づいた評価項目から説明変数を構成した。その結果を表-2に示す。

ここでは、表-2に示した各変数についてみていく。

まず、各新聞記事の動作記述文の有無と、全文数に対する動作記述文の割合を変数として、「動作記述文の有無ダミー」と「動作記述文の割合」を構成した。同様に、状況記述文についても、「状況記述文の有無ダミー」と「状況記述文の割合」を構成した。なおその他の変数についても同様であるが、「有無ダミー」と「割合」を別変数として設けているのは、後述のようにステップワイズ法による変数選択においてどちらが適切であるか選択することを予定してのことである。

続いて、各新聞記事の主語が固有名詞である文の有無と、全文数に対する主語が固有名詞である文の割合を変数として、「固有名詞主語の文の有無ダミー」と「固有名詞主語の文の割合」を構成した。

表-2 文法上の主語・述語に基づいた評価項目による変数

文の主語・述語に着目した評価項目	
12	動作記述文の有無ダミー(1:登場する, 0:登場しない)
13	動作記述文の割合
14	状況記述文の有無ダミー(1:登場する, 0:登場しない)
15	状況記述文の割合
16	固有名詞主語の文の有無ダミー(1:登場する, 0:登場しない)
17	固有名詞主語の文の割合
18	個人主語の文の有無ダミー(1:登場する, 0:登場しない)
19	個人主語の文の割合
20	組織主語の文の有無ダミー(1:登場する, 0:登場しない)
21	組織主語の文の割合
22	曖昧主語の文の有無ダミー(1:登場する, 0:登場しない)
23	曖昧主語の文の割合
24	固有名詞（公的個人）主語の文の有無ダミー(1:登場する, 0:登場しない)
25	固有名詞（公的個人）主語の文割合
26	固有名詞（非公的個人）主語の文の有無ダミー(1:登場する, 0:登場しない)
27	固有名詞（非公的個人）主語の文割合

続いて、各新聞記事の主語が個人（「固有名詞（公的個人）」＋「固有名詞（非公的個人）」＋「固有名詞でない個人」）である文の有無と、全文数に対する主語が個人である文の割合を変数として、「個人主語の文の有無ダミー」と「個人主語の文の割合」を構成した。組織主語、曖昧主語についても、主語が個人である場合と同様に、「組織主語の文の有無ダミー」、「組織主語の文の割合」、「曖昧主語の文の有無ダミー」、「曖昧主語の文の割合」を構成した。

この他、主語が「固有名詞（公的個人）」の場合、読者が新聞記事を読解する際の視点を獲得しやすくなると考えられるため、各新聞記事の主語が「固有名詞（公的個人）」の文の有無と、全文数に対する主語が「固有名詞（公的個人）」の文の割合を変数として、「固有名詞（公的個人）主語の文の有無ダミー」と「固有名詞（公的個人）主語の文割合」を構成した。さらに「固有名詞（非公的個人）」についても同様の理由から、「固有名詞（非公的個人）主語の文の有無ダミー」、「固有名詞（非公的個人）主語の文の割合」を構成した。

h) 要素文における評価項目

各文の要素文における主語・述語の判断を行った。ここで要素文とは、以下の(ア)、(イ)に該当しない全ての動詞が形成する節のことを指す。

- (ア) 各文章の文法的な述語と考えられる動詞。
- (イ) 発話中（鍵括弧内）の動詞。

たとえば、「入所者9人が亡くなった高齢者グループホーム「楽ん楽ん」は避難勧告がないまま濁流にのみ込まれた。」という文における「入所者9人が亡くなった」の部分が要素文に当たる。

評価は、前節で述べた「文」における場合と同様に行った。その結果を表-3に示す。

表-3 要素文における評価項目による変数

要素文に着目した評価項目	
28	要素文数
29	一文当たりの要素文数
30	要素文における動作記述文の有無ダミー(1:登場する, 0:登場しない)
31	要素文における動作記述文の割合
32	要素文における状況記述文の有無ダミー(1:登場する, 0:登場しない)
33	要素文における状況記述文の割合
34	要素文における固有名詞主語の文の有無ダミー(1:登場する, 0:登場しない)
35	要素文における固有名詞主語の文の割合
36	要素文における個人主語の文の有無ダミー(1:登場する, 0:登場しない)
37	要素文における個人主語の文の割合
38	要素文における組織主語の文の有無ダミー(1:登場する, 0:登場しない)
39	要素文における組織主語の文の割合
40	要素文における曖昧主語の文の有無ダミー(1:登場する, 0:登場しない)
41	要素文における曖昧主語の文の割合
42	要素文における固有名詞（公的個人）主語の有無ダミー(1:登場する, 0:登場しない)
43	要素文における固有名詞（公的個人）主語の割合
44	要素文における固有名詞（非公的個人）主語の有無ダミー(1:登場する, 0:登場しない)
45	要素文における固有名詞（非公的個人）主語の割合

i) 発話に関する評価項目

まず、発話内の句点の数と鍵括弧の終わり())の和を発話回数としてカウントした。次に、発話主を、「固有名詞（公的個人）」、「固有名詞（非公的個人）」、「固有名詞でない個人」、「曖昧なもの」、「筆者」のいずれかに分類した。そして、該当する場合には「発話主判断ダミー」に1を、該当しない場合には0をそれぞれ記入した。さらに、各発話に「プライベートエピソード」、「擬人法」、「感情表現」、「価値判断」が含まれているか否かをそれぞれ判断し、含まれている文には「プライベートエピソードの有無ダミー」、「擬人法の有無ダミー」、「感情表現の有無ダミー」、「価値判断の有無ダミー」にそれぞれに1を、含まれていない文にはそれぞれに0を記入した。

上述の、発話に関する評価項目から、説明変数を構成した。その結果を表-4に示す。

ここでは、表-4に示した各変数についてみていく。

まず、各新聞記事における発話の有無と発話回数をカウントし、「発話の回数」を構成した。

続いて、各新聞記事の発話の有無と、全文数に対する発話の回数を変数とし、「発話の有無ダミー」、「全文数に対する発話の割合」とした。

続いて、各新聞記事の発話主が「固有名詞（公的個人）」である発話の有無と、全文数に対する発話主が「固有名詞（公的個人）」である発話数の割合を変数として、「発話主が「固有名詞（公的個人）」である発話の有無ダミー」、「発話主が「固有名詞（公的個人）」である発話の割合」を構成した。同様に「固有名詞（非公的個人）」についても「要素文における固有名詞（非公的個人）主語の有無ダミー」、「要素文における固有名詞（非公的個人）主語の割合」を構成した。

続いて、発話における「プライベートエピソード」の有無と、全発話数に対する「プライベートエピソード」登場文章数の割合を変数とし、それぞれ「発話における

表-4 発話に関する評価項目による変数

発話に着目した評価項目	
46	発話の回数
47	発話の有無ダミー(1:登場する, 0:登場しない)
48	全文数に対する発話の割合
49	発話主が「固有名詞（公的個人）」である発話の有無ダミー(1:登場する, 0:登場しない)
50	発話主が「固有名詞（公的個人）」である発話の割合
51	発話主が「固有名詞（非公的個人）」である発話の有無ダミー(1:登場する, 0:登場しない)
52	発話主が「固有名詞（非公的個人）」である発話の割合
53	発話における「プライベートエピソード」の有無ダミー(1:登場する, 0:登場しない)
54	発話における「プライベートエピソード」登場割合
55	発話における「擬人法」の有無ダミー(1:登場する, 0:登場しない)
56	発話における「擬人法」登場割合
57	発話における「感情表現」の有無ダミー(1:登場する, 0:登場しない)
58	発話における「感情表現」登場割合
59	発話における「価値判断」の有無ダミー(1:登場する, 0:登場しない)
60	発話における「価値判断」登場文割合

「プライベートエピソード」の有無ダミー」, 「発話における「プライベートエピソード」登場割合」を構成した。同様に, 発話における「擬人法」, 「感情表現」, 「価値判断」についても, 「発話における「擬人法」の有無ダミー」, 「発話における「擬人法」登場割合」, 「発話における「感情表現」の有無ダミー」, 「発話における「感情表現」登場割合」, 「発話における「価値判断」の有無ダミー」, 「発話における「価値判断」登場割合」を作成した。

j) その他物語性を評価する項目

その他物語性を評価する項目として, 「対立構造」, 「謝罪構造」, 「協力構造」, 「演劇的役割付与人物描写」, 「登場人物の間柄の描写」, 「プライベートエピソード」, 「擬人法」, 「感情表現」, 「価値判断」が含まれているか否かをそれぞれ判断し, 含まれている文には「対立構造の有無ダミー」, 「謝罪構造の有無ダミー」, 「協力構造の有無ダミー」, 「演劇的役割付与人物描写の有無ダミー」, 「登場人物の間柄の描写の有無ダミー」, 「プライベートエピソードの有無ダミー」, 「擬人法の有無ダミー」, 「感情表現の有無ダミー」, 「価値判断の有無ダミー」にそれぞれに1を, 含まれていない文にはそれぞれに0を記入した。

上述の, 文単位で評価を行う項目から, 説明変数を構成した。その結果を表-5に示す。

ここで, 表-5に示した各変数についてみていく。

各新聞記事の「対立構造」の有無と, 全文数に対する「対立構造」登場文章数を変数とし, 「「対立構造」の有無ダミー」, 「「対立構造」登場文章割合」とした。同様に, 「謝罪構造」, 「協力構造」, 「演劇的役割付与人物描写」, 「人間関係描写」, 「プライベートエピソード」, 「擬人法」, 「感情表現」, 「価値判断」,

「不確実な将来に関する時間体験」についてもそれぞれ変数を構成した。

k) 確実な将来に関する時間体験

最後に, 「不確実な将来に関する時間体験」が含まれているか否かをそれぞれ判断し, 含まれている文章には「不確実な将来に関する時間体験の有無ダミー」に1を, 含まれていない文章には0を記入した。

この評価項目を採用する理論的な理由は次のようなものである。リクール³⁹⁾は, 抽象的で均質な時間の流れというものとは人間にとって経験可能なものではなく, 我々人間は常に, 物語化の能力によって分節化された, 特殊な時間を経験しているのだと主張した。その特殊で具体的な時間性の経験というものは, 様々な特徴を持つであろうが, 本研究においては, 「不確実な将来に向かう時間性の経験」に注目することとした。我々人間は, たとえば小説等の物語作品を, 複数回鑑賞することがある。既にその結末を知っているにも関わらず, 物語作品にのめり込み, その魅力を味わうことができるのである。これは, 物語にのめり込んでいる際の我々の意識が, 確定的であるはずの物語の結末を「不確実化」しているということに他ならない。本研究では, この不確実化された時間体験が, 物語へののめり込みを促し, その魅力を増大させるのではないかと想定することとする。

本研究で調査した範囲においては「不確実な将来へ向かう時間体験」という概念を明示的に取り上げ, あるいは注目した既往研究は存在していないが, この概念が重要である可能性が示唆される研究はいくつか存在する。McAndrew⁵⁴⁾は, 人間が「ゴシップ」の共有を好んで行う傾向について論考した際に, ゴシップに登場する人物たちの「意図」を想像し, 「他人が将来どのように行動するか」をシミュレーションするという営みが, 複雑な社会関係の中で巧妙に生き残っていくための能力の涵養につながっている可能性を指摘している。人間が物語にのめり込むのは, 「将来何がおきるのだろう」というシミュレーションを行うための思考スキルの訓練としての側面を持つのである。また, 物語への接触を通じた態度変容に関する実証研究の方法として近年広がりを見せている, 移入 (transportation) の研究においては, Green & Brock⁹⁾の開発した「移入尺度」によって物語へ没頭した度合いが計測され, その度合いと態度変容の関係が分析されるのであるが, 移入尺度には「I wanted to learn how the narrative ended.」という項目が含まれている。つまりこうした研究においては, 「結末がどうなるのだろう」という関心を持つことそのものが, 物語にのめりこむ体験の重要な要素であると捉えられているということである。このように既往研究において, 明示的ではないものの「不確実な将来に向かう時間体験」の重要性が示唆されていることから, 本研究においては明示的にこの体験の

表-5 文単位で評価を行う項目による変数の構成

その他物語性に関連することが予想される評価項目	
61	「対立構造」の有無ダミー(1:登場する, 0:登場しない)
62	「対立構造」登場文割合
63	「謝罪構造」の有無ダミー(1:登場する, 0:登場しない)
64	「謝罪構造」登場文割合
65	「協力構造」の有無ダミー(1:登場する, 0:登場しない)
66	「協力構造」登場文割合
67	「演劇的役割付与人物」の有無ダミー(1:登場する, 0:登場しない)
68	「演劇的役割付与人物」登場文割合
69	「人間関係描写」の有無ダミー(1:登場する, 0:登場しない)
70	「人間関係描写」登場文割合
71	「プライベートエピソード」の有無ダミー(1:登場する, 0:登場しない)
72	「プライベートエピソード」登場文割合
73	「擬人法」の有無ダミー(1:登場する, 0:登場しない)
74	「擬人法」登場文割合
75	「感情表現」の有無ダミー(1:登場する, 0:登場しない)
76	「感情表現」登場文割合
77	「価値判断」の有無ダミー(1:登場する, 0:登場しない)
78	「価値判断」登場文割合
79	「不確実な将来に関する時間体験」の有無ダミー(1:登場する, 0:登場しない)
80	「不確実な将来に関する時間体験」文章割合

表-6 被験者の属性

年齢	男性	女性
20代	21人	22人
30代	21人	21人
40代	22人	22人
50代	22人	22人
60代	23人	22人
合計	109人	109人

表-7 社会問題への関心全般

社会問題への関心全般	
q1_1	普段から、政治、経済、社会問題等に関心を払っている。
q1_2	政治、経済、社会問題に対して、自分の意見を強く持っているほうだと思う。
q1_3	政治、経済、社会問題について、人と議論するのは好きだ。
q1_4	新聞、テレビ、ネットのニュースから情報を収集するのが好きだ。

もたらす効果の実証を試みることにした。

(5) 新聞記事 Web アンケート概要

株式会社クロス・マーケティングを通じて、全国の男女 218 人を対象にインターネットを利用したアンケート調査を実施した。属性の割り付けとしては、年齢階層として 20 代、30 代、40 代、50 代、60 代の 5 段階を設け、男女の性別と併せて合計で 10 セルの年齢×性別階層を設け、各セルの人数が均一になるように行った(表-6)。そして、「あなたご自身に関するアンケート」と題した案内メールを調査会社から配信し、Web 画面上での回答を要請した。本調査は平成 29 年 1 月 27 日～平成 29 年 1 月 30 日の 4 日間実施され、218 人(平均年齢 45.27 歳、年齢標準偏差 13.81、男女比 50%) から回答を得た。

(6) 調査項目

a) 個人属性

回答者の属性として、年齢、性別、居住地、職業に関する回答を要請した。

b) 社会問題関心度

実験結果に影響を及ぼすことが想定される個人の特徴である「パーソナリティ」として、「社会問題関心度」について 4 項目を設定し「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」までの 7 段階で回答を要請した(表-7)。

また、「各テーマの社会問題への関心の程度」として、「政治」、「経済」、「社会」、「文化・科学」、「事故・災害」、「国際」の 6 項目に対してそれぞれ「全く関心がない」から「非常に関心がある」の 7 段階で回答を要請した(表-8)。

c) 物語志向性

実験結果に影響を及ぼすことが想定される他の要因として、人々の物語的な認知能力や物語を用いたコミュニケーションへの選好の程度である物語志向性を計測する。

表-8 社会問題のテーマごとの関心

関心のある社会問題のテーマ	
q2_1	以下の事柄について、どのくらい関心があるかを「全く関心がない」から「非常に関心がある」の 7 段階で回答して下さい。／政治
q2_2	以下の事柄について、どのくらい関心があるかを「全く関心がない」から「非常に関心がある」の 7 段階で回答して下さい。／経済
q2_3	以下の事柄について、どのくらい関心があるかを「全く関心がない」から「非常に関心がある」の 7 段階で回答して下さい。／社会
q2_4	以下の事柄について、どのくらい関心があるかを「全く関心がない」から「非常に関心がある」の 7 段階で回答して下さい。／文化・科学
q2_5	以下の事柄について、どのくらい関心があるかを「全く関心がない」から「非常に関心がある」の 7 段階で回答して下さい。／事故・災害
q2_6	以下の事柄について、どのくらい関心があるかを「全く関心がない」から「非常に関心がある」の 7 段階で回答して下さい。／国際

表-9 物語志向性尺度

物語誘引力	
q3_1	簡単な「たとえ話」をすることで、相手にわかってもらえることが多い。
q3_2	少し経緯がややこしい出来事であっても、全体を簡単に要約して伝えるのは得意だ。
q3_3	過去の出来事を思い出し、時間の流れに沿ってわかりやすく説明するのが得意だ。
q3_4	会話の中で、「おもしろいエピソード」で人の関心をつかむことが多い。
q3_5	「なるほど!」と思わせるような話の展開や筋書きを考えるのが、我ながら得意だと感じる人が多い。
q3_6	人に何かを説明するときに、自分の経験談を交えることが多い。
q3_7	「起承転結」や「振り」と「落ち」のように、構成や展開をきちんと意識して話すことが多い。
q3_8	人を説得して何かをさせようとするときは、「こうすれば、こうなるだろう」というストーリーを具体的に説明する。
物語感得力	
q3_9	分かりにくい話でも、たとえ話をされると「なるほど」と腑に落ちることが多い。
q3_10	小説を読むとき、登場人物や情景を鮮明にイメージすることができる。
q3_11	小説や映画などを鑑賞するとき、その作品の世界にどっぷり入り込んでしまう方である。
q3_12	人の経験談や教訓を聞いて、自分自身の生活や人生の中でも生かすことができる。
q3_13	小説や映画などの作品を鑑賞するのが好きだ。
q3_14	学校の国語の授業では、評論文よりも物語文の読解が得意だった。
q3_15	小説や映画などの登場人物に感情移入してしまい、自分のこのように嬉しくなったり悲しくなったりすることがある。
q3_16	小説や映画などのストーリーが、自分の人生にとって大きな意味を持つと感じることがある。
物語共有傾向	
q3_17	「最近あった身近な出来事」について、家族や友人に長々と話してしまうことがある。
q3_18	家族や友人が、昔話や思い出話を語っているのを聞くのは楽しい。
q3_19	友人や知人についてのうわさ話をして盛り上がるのがよくある。
q3_20	つい、人の昔話を聞き出そうとしてしまう。
q3_21	自分の人生や人間性について語る時、よく引き合いに出す過去のエピソードがある。

そこで、先行研究⁵⁾において構成された「物語志向性尺度」を用いる。

「物語志向性尺度」は、「他人を物語モードに入らせる上手さについての能力・傾向」である「物語誘引力」、
「自分自身が物語モードに入りやすいという能力・傾向」である「物語感得力」、
「他人と一緒に物語モードに浸ることで社会関係をうまく構築していく能力・傾向」である「物語共有傾向」の下位尺度から形成されている(表-9)。本調査では、各項目について、「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」までの 7 段階で回答を要請した。

d) 移入度

既往研究では、物語に触れることにより、移入の度合いが高まることが指摘されている。そこで、本研究では“物語接触時に読者の注意、感情などが物語内で生じている出来事に統合的に融合される心的現象”である移入の度合いを計測する。そこで、先行研究⁹⁾において使用された「Transportation Scale」11 項目を基に、従来の文学向けのものから今回用いる新聞記事で使用できるように質問項目の文言に修正を加えた「移入尺度」を用いる(表-10)。

e) シナリオの難しさに関する質問

シナリオ読了効果に影響を与える要因として、文章が物語的に構成されているかどうか、ということの他に、文章の内容そのものが理解しづらいということが考えられる。そこで、回答者が感じた「シナリオの難しさの程度」を計測する(表-11)。

f) シナリオ読了効果

本実験では、高橋ら⁹⁾がシナリオ読了効果の計測に用いた項目のうち、「人物評価」を除く「納得性」「関心向上性」「自我関与性」の3項目を採用し、「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」までの7段階で回答を要請した。「納得性」は“シナリオの内容に対する納得感”が、「関心向上性」は“シナリオの内容に対する関心の向上度合い”が、「自我関与性」は“シナリオの内容をどれだけ身近に感じられたか”がそれぞれ反映されるような質問項目から構成している(表-12)。

なお、「人物評価」を除いた理由として、新聞記事には登場人物や明確に主人公と呼べる人物が登場しないことがあり、全てのシナリオに対して共通して用いることのできる質問項目の作成は難しいと判断したためである。

4. 新聞記事を用いた物語型コミュニケーションの有効性の検証

(1) 基本分析

a) データ整理

アンケート実施段階で、新聞記事の表示画面に 30 秒

表-10 移入尺度

移入尺度	
q4.1/ q6.1/ q8.1	文章内で起こっている出来事とありありと思い描くことができた。
q4.2/ q6.2/ q8.2	この文章を読んでいるあいだ、あまり集中できず、自分の周りで起きていることが気になった。(*)
q4.3/ q6.3/ q8.3	文章内に描かれた出来事の場面に、まるで自分もいるかのように感じた。
q4.4/ q6.4/ q8.4	読んでいて、文章に心が引き込まれた。
q4.5/ q6.5/ q8.5	読み終えてすぐ、文章内の出来事は忘れて現実に戻ることができた。(*)
q4.6/ q6.6/ q8.6	この文章がどういう終わり方をするのか、読みながらとても気になった。
q4.7/ q6.7/ q8.7	この文章は、私の感情をゆさぶった。
q4.8/ q6.8/ q8.8	ここに描かれているのは別の展開になる可能性を考えた。
q4.9/ q6.9/ q8.9	この文章を読んでいるあいだ、あれこれ考えてしまっって集中できなかった。(*)
q4.10/ q6.10/ q8.10	文章内の出来事は、私の日常生活にも関係があると思う。
q4.11/ q6.11/ q8.11	この文章に描かれた出来事は、私の人生を変えようと思う。

(*) 逆転項目

表-11 シナリオの難しさに関する質問

シナリオの難しさ	
q4.12/ q6.12/ q8.12	この文章を難しいと感じた。

表-12 シナリオ読了効果

納得性	
q5.1/ q7.1/ q9.1	この文章の内容は、とても腑に落ちるものだった。
q5.2/ q7.2/ q9.2	この文章は理解しやすかった。
q5.3/ q7.3/ q9.3	この文章について、とくに疑問に思うことはない。
関心向上性	
q5.4/ q7.4/ q9.4	この文章を読む前よりも、この文章で取り上げられていた題材への関心が強くなった。
q5.5/ q7.5/ q9.5	この文章の題材について他にも情報があれば読みたいと思った。
q5.6/ q7.6/ q9.6	この文章の題材について、知りたかったこと、気になることがいくつか浮かんだ。
自我関与性	
q5.7/ q7.7/ q9.7	この文章を読んで、自分も文章内の出来事と無縁ではないだろうと感じた。
q5.8/ q7.8/ q9.8	この文章で描かれている出来事は、人ごととは思えない。
q5.9/ q7.9/ q9.9	この文章の題材について、自分としても色々考えていかなければならぬと思った。

の強制滞在時間を設け、不正回答を排除できるように配慮を行った。表-10 に示した質問項目のうち逆転項目については、7 件法で計測されているデータの数値の 1 から 7 を 7 から 1 に逆転したものをを用いることとした。

b) 信頼性分析

「社会問題関心度」, 「物語志向性」, 「移入尺度」, 「シナリオ読了効果」の各下位尺度に対して信頼性分析を行った結果を表-13 に示す。

すべての下位尺度において信頼性係数 α が 0.750 以上となり、一定の信頼性が確保されていることが確認された。よって以降の分析において、各尺度は質問項目によって得られた測定値の加算平均を用いることとした。

(2) 記述統計量

表-14 に、パーソナリティに関する項目の回答者数 (n), 平均値 (Mean), 標準偏差 (SD) を、表-15 に、新聞記事 01-36 に対する「移入尺度」, 「シナリオの難しさ」, 「納得性」, 「関心向上性」, 「自我関与性」の回答者数 (n), 平均値 (Mean), 標準偏差 (SD) を示す。

なお、すべての尺度は「1 点: 全く当てはまらない」から「7 点: 非常に当てはまる」の 7 段階の得点となっている。

(3) 分析結果

新聞記事の物語性と読了効果の関係を明らかにするために、従属変数を「移入尺度」, 「納得性」, 「関心向上性」, 「自我関与性」とし、独立変数を表-1, 表-2, 表-3, 表-4, 表-5 に示した 76 項目とした回帰分析を行った。表-1 から表-5 に上げたすべての独立変数の中からステップワイズの変数増加法を用いて変数選択を行った結果、表-16 から表-19 の結果が得られた。以下では、各従属変数について得られた分析結果と考察を述べる。

表-13 信頼性分析の結果

尺度	α
社会問題関心度	0.915
物語誘引力	0.935
物語感得力	0.899
物語共有傾向	0.858
移入尺度	0.763
納得性	0.823
関心向上性	0.894
自我関与性	0.928

表-14 パーソナリティに関する項目の記述統計量

尺度	n	M	SD
社会問題関心度	218	4.034	1.508
物語誘引力	218	3.920	1.255
物語感得力	218	4.279	1.207
物語共有傾向	218	3.828	1.222

表-15 新聞記事ごとの記述統計量

	移入尺度			納得性			関心向上性			自我関与性		
	n	Mean	SD	n	Mean	SD	n	Mean	SD	n	Mean	SD
記事01	18	3.47	0.68	18	3.41	1.34	18	3.11	1.23	18	3.37	1.28
記事02	18	3.83	0.95	18	4.20	0.83	18	4.24	1.05	18	4.00	1.28
記事03	19	4.00	0.62	19	4.49	0.59	19	4.02	0.82	19	4.54	0.83
記事04	18	3.88	0.58	18	4.39	1.00	18	3.76	1.19	18	3.44	1.17
記事05	18	3.94	0.48	18	4.00	0.54	18	4.44	0.77	18	4.72	0.68
記事06	18	3.84	0.70	18	4.02	1.29	18	4.07	1.37	18	3.87	1.19
記事07	18	4.04	0.59	18	4.48	0.64	18	4.37	0.88	18	4.78	0.89
記事08	18	3.69	0.77	18	4.26	0.71	18	3.81	1.18	18	3.67	1.20
記事09	18	3.77	0.50	18	4.76	0.98	18	4.13	0.94	18	4.31	1.01
記事10	18	3.55	0.69	18	4.02	0.98	18	3.52	1.23	18	3.45	1.09
記事11	19	3.61	0.61	19	3.86	1.20	19	3.75	1.19	19	3.75	1.32
記事12	18	3.67	0.67	18	3.89	1.27	18	3.44	1.11	18	3.91	1.36
記事13	18	3.73	0.74	18	3.96	1.12	18	3.80	1.32	18	3.39	1.26
記事14	18	3.85	0.67	18	4.07	0.96	18	3.85	1.06	18	3.72	1.22
記事15	18	4.03	0.58	18	4.69	0.90	18	4.20	1.16	18	4.35	1.08
記事16	18	3.10	0.83	18	4.24	1.05	18	3.22	1.17	18	3.35	1.31
記事17	18	3.87	0.68	18	4.11	0.89	18	4.26	0.66	18	4.28	0.91
記事18	18	3.40	0.77	18	3.69	0.84	18	3.61	1.11	18	3.94	1.06
記事19	18	4.00	0.80	18	3.96	1.39	18	3.76	1.45	18	4.24	1.40
記事20	18	3.42	0.76	18	4.02	0.55	18	3.70	0.87	18	3.52	1.52
記事21	18	3.56	0.65	18	4.07	0.80	18	3.94	0.87	18	3.72	0.84
記事22	19	3.72	0.56	19	4.44	0.84	19	3.84	0.88	19	3.40	1.25
記事23	19	3.66	0.71	19	3.88	0.89	19	3.67	1.09	19	3.28	1.39
記事24	18	3.38	0.71	18	4.00	0.72	18	3.78	1.19	18	3.41	1.09
記事25	18	3.53	1.00	18	4.06	1.20	18	4.00	1.39	18	3.57	1.54
記事26	18	3.66	0.97	18	3.76	1.46	18	3.94	1.49	18	3.61	1.44
記事27	18	3.67	0.81	18	3.80	1.09	18	3.72	1.16	18	3.81	1.17
記事28	18	3.58	0.89	18	3.94	1.36	18	3.28	1.42	18	3.48	1.34
記事29	18	3.40	0.87	18	3.85	1.08	18	3.24	1.07	18	3.43	1.12
記事30	18	3.59	0.64	18	3.78	0.65	18	3.59	0.98	18	3.94	1.07
記事31	18	3.83	0.65	18	4.63	0.91	18	3.85	1.14	18	4.15	1.07
記事32	18	3.83	0.61	18	4.02	1.01	18	3.80	1.26	18	3.57	1.03
記事33	19	4.02	0.51	19	4.25	0.52	19	4.39	0.65	19	4.60	0.90
記事34	18	3.75	0.71	18	3.98	1.43	18	3.67	1.36	18	4.07	1.34
記事35	18	3.20	0.81	18	3.44	0.88	18	3.26	1.39	18	3.20	1.35
記事36	19	3.45	0.93	19	4.04	0.50	19	3.98	0.58	19	4.30	0.81

a) 従属変数を「移入尺度」とした回帰分析

従属変数を「移入尺度」とした回帰分析を行った結果を以下に示す。

「移入尺度」に対しては、「物語共有傾向」、「社会問題への関心全般」、「テーマダミー04」、「『協力構造』の有無ダミー」に有意なパラメータが検出された(表-16)。自由度調整済み決定係数R²は 0.224 となった。

それぞれの標準回帰係数についてみると、「物語共有傾向」には、正の有意なパラメータが検出され、その標準回帰係数の大きさは 0.342 だった。「社会問題への関心全般」には、正の有意なパラメータが検出され、その標準回帰係数の大きさは 0.195 だった。「テーマダミー04」には、正の有意なパラメータが検出され、その標準回帰係数の大きさは 0.193 だった。「『協力構造』の有無ダミー」には、負の有意なパラメータが検出され、その標準回帰係数の大きさは-0.091 だった。

次に、「移入尺度」に対して有意になった各変数について考察を加える。

まず、読者のパーソナリティに関する項目では、「移入尺度」に対して「物語共有傾向」と「社会問題への関心全般」が正の影響を与えていることが確認された。

表-16 移入尺度を従属変数とする回帰分析の結果

従属変数:移入尺度						
	説明変数	非標準化係数	標準誤差	標準回帰係数	t値	有意確率
個人属性	(定数)	2.208	.126		17.549	.000
	物語共有傾向	.264	.027	.342	9.744	.000
	社会問題への関心全般	.110	.020	.195	5.535	.000
文章属性	テーマダミー04(事故・災害:1, それ以外:0)	.361	.065	.193	5.592	.000
	「協力構造」の有無ダミー	-.141	.054	-.091	-2.620	.009

調整済みR² = .224

「物語共有傾向」は「他人と一緒に物語モードに浸ることで社会関係をうまく構築していく能力や傾向」を表す尺度であり、他人の話を聞いたり自分の話をすることに対する選好を示す。高い物語共有傾向を有している人は、新聞記事に書かれた出来事に関する情報を物語的に読み取ろうとする傾向が高いため、移入度も高くなったという可能性が考えられる。

「社会問題への関心全般」についてしてみると、社会問題への関心が高く、積極的に社会問題についての情報を収集している傾向が高い人は、新聞などで取り上げられる社会問題についての背景知識を有していたり、新聞から社会問題に関する情報を収集することに慣れているということが考えられる。その結果、文章内の出来事がありありと思ひ描くことができ、自身の日常生活との関係を想像することが容易になったため、高い移入度を示した可能性が考えられる (cf. 表-10)。

次に、文章属性に関する項目では、「移入尺度」に対して「テーマダミー04」に正の影響が、「『協力構造』の有無ダミー」に負の影響が確認された。「テーマダミー04」に正の影響が確認されたことは、「事故・災害」に関するテーマを扱う新聞記事は移入度が高くなるということを示している。事故・災害を扱う新聞記事は、具体的には台風と地震に関する情報を扱っている。この変数に正の有意なパラメータが検出された理由としては次のような解釈が考えられる。すなわち、日本に生活する読者は、地震による揺れを感じたり、台風によって雨が降るのを目にしたりと、災害の実体験を有していると考えられる。それゆえ、災害に関連する出来事は、政治や経済の出来事に比べて鮮明な記憶として蓄積されるため、想起されやすくなるという可能性が考えられる。以上のことから、「事故・災害」をテーマとする新聞記事の移入度が高くなったという可能性が考えられる。

「協力構造」の有無が移入の度合いに負の影響を与えることについて、次のような解釈が考えられる。「協力構造」有りだと判断した文としては、「「パリでは、私たちが一丸となったときに何が出来るかを世界に示すことができる」と呼びかけた。(12-19)」や「ゴープ氏はジョンソン氏と二人三脚で離脱運動を主導。(29-11)」(下線部が協力構造であると判断した表現)などがある。読者が協力構造を捉えるには、協力関係の背後にある登場人物の意図を把握する必要があるものと考えられる。しか

表-17 納得性を従属変数とした回帰分析の結果

従属変数: 納得性, 多重共線性を持つ疑義のある「物語共有傾向」を分析から除外						
	説明変数	非標準化係数	標準誤差	標準回帰係数	t 値	有意確率
	(定数)	1.559	.174		8.960	.000
個人属性	物語感得力	.400	.039	.363	10.144	.000
	社会問題への関心全般	-.174	.027	-.227	6.368	.000
	「テーマダミー04(事故・災害:1, それ以外:0)」	.351	.087	.138	4.016	.000
文章属性	「演劇的役割付与人物」登場文章割合	2.292	.918	.086	2.497	.013

調整済みR² = .254

し、新聞記事はその性質上、協力関係の描写はあっても協力に至った登場人物の意図が描写されていないことが少なくない。それゆえ、読者は協力関係の背後にある事情や意図を想像するために脳の処理資源を使用し、移入度が低減したという可能性が考えられる。

b) 従属変数を「納得性」とした回帰分析

従属変数を「納得性」とした回帰分析を行った結果を以下に示す。なお、「物語感得力」、「物語誘引力」、「物語共有傾向」の共線性の統計量 VIF(分散拡大係数)は、それぞれ 1.835, 2.032, 1.751 となり、多重共線性がある疑いが確認されたので、「物語共有傾向」を分析から除外した。

分析の結果、「納得性」に対しては「物語感得力」、「社会問題への関心全般」、「テーマダミー04」、「『演劇的役割付与人物』登場文章割合」、に有意なパラメータが検出された(表-17)。自由度調整済み決定係数R²は 0.254 となった。

それぞれの標準回帰係数についてみると、「物語感得力」(標準回帰係数: 0.363)、「社会問題への関心全般」(標準回帰係数: 0.227)、「テーマダミー04」(標準回帰係数: 0.138)、「『演劇的役割付与人物』登場文章割合」(標準回帰係数: 0.086)に正の有意なパラメータが検出された。

次に、「納得性」に対して有意になった各変数について考察を加える。

まず、読者のパーソナリティに関する項目では、「納得性」に対して「物語感得力」と「社会問題への関心全般」が正の影響を与えているのが確認された。「物語感得力」は「自分自身が物語モードに入りやすいという能力や傾向」を表している⁵⁾。各尺度の質問項目(表-9)に着目してみると、「物語感得力」は出来事を物語的に把握する能力であると解釈できる。「物語感得力」が「納得性」に対して正の影響を与えていたことは、出来事を物語的に読み取る能力が高い人は、新聞記事に対して高い納得感を示していることを表している。物語モードに入りやすい人が、物語形式 or 説明文形式の文章に関わらず高い納得性を示すことは既往研究において指摘されており⁶⁾、この結果は新聞記事においても既往研究で得られた知見を支持する形となっていると考えられる。

「社会問題への関心全般」についてみてみると、社会問題への関心が高く、積極的に社会問題の情報を収集し

ている傾向が高い人は、新聞などで取り上げられる社会問題についての背景知識を有しているということが考えられる。それゆえ、新聞記事で取り上げられた出来事を比較的容易に理解することができたので、「社会問題への関心全般」が高い人は高い納得感を得たという可能性を考察することができる。

次に、文章属性に関する項目では、「納得性」に対して「テーマダミー04」と「『演劇的役割付与人物』登場文章割合」が正の影響を与えていることが確認された。

「テーマダミー04」についてみてみると、これは、「事故・災害」に関するテーマを扱う新聞記事は納得度が高くなるということを示している。

「移入尺度」を従属変数とした分析の考察を踏まえて、「納得性」と「テーマダミー04」についての考察を行う。先に、災害を扱った新聞記事に対して移入度が高くなる理由として、日本で生活する読者の大半は、地震や台風といった災害に対する実体験を有しているがためであるとの可能性を指摘した。そして、移入度が高まることにより、納得感が向上するという心理的プロセスは既に既往研究で指摘されている⁹⁾。このことから、災害に関する新聞記事は高い納得度を示したという可能性が考えられる。

「『演劇的役割付与人物』登場割合」とは、「同社が中元・歳暮を贈った校長らは、教科指導に実績がある地域のリーダー的存在だ。(23-25)」と「ダークホース的存在は残留派のステイブン・クラブ雇用・年金相(43)だ。(29-15)」(※下線部が演劇的役割付与と判断した描写)といった文に見られるように、新聞記事の筆者が恣意的に登場人物に役割を付与した表現を含む文の割合のことである。登場人物の役割が付与されることで、新聞記事に描かれている登場人物の立ち位置が明確になり、読者が新聞記事に描かれている出来事の構造を把握しやすくなったという可能性が考えられる。

c) 従属変数を「関心向上性」とした回帰分析

従属変数を「関心向上性」とした回帰分析を行った結果を以下に示す。「関心向上性」に対して「物語感得力」と「社会問題への関心全般」が正の影響を与えているのが確認された。

「関心向上性」に対しては、「社会問題への関心全般」、「物語共有傾向」、「物語誘引力」、「テーマダミー04」、「『協力構造』の有無ダミー」に有意なパラメータが検出された(表-18)。自由度調整済み決定係数R²は 0.236 となった。

それぞれの標準回帰係数について見てみると、「社会問題への関心全般」(標準回帰係数: 0.267)、「物語共有傾向」(標準回帰係数: 0.219)、「物語誘引力」(標準回帰係数: 0.114)、「テーマダミー04」(標準回帰係数: 0.116)に正の有意なパラメータが検出された。

表-18 関心向上性を従属変数とした回帰分析の結果

従属変数: 関心向上性						
	説明変数	非標準化係数	標準誤差	標準回帰係数	t 値	有意確率
	(定数)	1.407	.196		7.190	.000
個人属性	社会問題への関心全般	.231	.034	.267	6.853	.000
	物語共有傾向	.261	.050	.219	5.263	.000
	物語誘引力	.126	.051	.114	2.464	.014
文章属性	テーマダミー04(事故・災害:1, それ以外:0)	.333	.099	.116	3.368	.001
	「協力構造」の有無ダミー	-.256	.082	-.107	-3.107	.002

調整済みR² = .236

「『協力構造』の有無ダミー」(標準回帰係数: -0.107)には負の有意なパラメータが検出された。

次に、「関心向上性」に対して有意になった各変数について考察を加える。

まず、読者のパーソナリティに関する項目では、「関心向上性」に対して「社会問題への関心全般」、「物語共有傾向」、「物語誘引力」が正の影響を与えているのが確認された。「社会問題への関心全般」についての考察を行う。「社会問題への関心全般」の質問項目(表-7)をみてみると、社会問題への関心の程度に加え、情報収集に対する選好を表す項目(ql_4)も含まれている。つまり、「社会問題への関心全般」が高い人は、そもそも新聞などから情報を収集すること自体を好むため、結果として、高い「関心向上性」を示したという可能性が考えられる。

「物語共有傾向」は、他人と一緒に物語モードに浸ることで社会関係をうまく構築していく能力や傾向を、「物語誘引力」は、他人を物語モードに入らせる上手さについての能力や傾向をそれぞれ表しており、どちらの能力も物語的なアウトプットに関する能力や傾向を表していると考えられる。物語的なアウトプットを行うには語り手が脳内で情報を物語的に組み立てる必要があると考えられる。よって語り手は多量の情報を必要とし、情報を得ようとするため関心が向上したものと考えられる。

次に、文章属性に関する項目では、「関心向上性」に対して「テーマダミー04」が正の影響を、「『協力構造』の有無ダミー」が負の影響をそれぞれ与えているのが確認された。

「テーマダミー04」についてみてみると、これは、「事故・災害」に関するテーマを扱う新聞記事は関心が向上するというを示している。「移入尺度」を従属変数とした分析の考察を踏まえて、「関心向上性」と「テーマダミー04」についての考察を行う。先に、災害を扱った新聞記事に対して移入度が高くなる理由として、日本で生活する読者の大半は、地震や台風といった災害に対する実体験を有しているがためであるとの可能性を指摘した。そして、移入度が高まることにより、関心が向上するという心理的プロセスは既に既往研究で指摘されている⁶⁾。このことから、災害に関する新聞記事に

表-19 自我関与性を従属変数とした回帰分析の結果

従属変数: 自我関与性, 多重共線性を持つ疑義のある「発話主が「固有名詞(非公的個人)」である発話の有無ダミー」, 「発話主が「固有名詞(非公的個人)」である発話の割合」を分析から除外						
	説明変数	非標準化係数	標準誤差	標準回帰係数	t 値	有意確率
	(定数)	1.018	.257		3.956	.000
個人属性	物語感得力	.182	.059	.136	3.063	.002
	社会問題への関心全般	.165	.034	.178	4.843	.000
	物語共有傾向	.271	.055	.212	4.954	.000
文章属性	テーマダミー04(事故・災害:1, それ以外:0)	.466	.126	.151	3.696	.000
	固有名詞(非公的個人)主語の文の有無ダミー	.381	.156	.099	2.443	.015
	個人主語の文の有無ダミー	.393	.142	.101	2.762	.006
	要素文における個人主語の文の割合	-.288	.124	-.084	-2.328	.020

調整済みR² = .214

する関心が向上したという可能性が考えられる。また別の解釈としては次のようなものが考えられる。日本では、どこでも常に災害発生のリスクに晒されているとことが考えられる。そして、1995年に発生した阪神淡路大震災や2011年に発生した東日本大震災など度重なる巨大災害の発生と、その後の防災教育などにより、既に読者の防災意識が醸成されていたという可能性が考えられる。このことから、事故・災害に関する新聞記事に対する関心が向上したという可能性も考えられる。

「『協力構造』の有無ダミー」が負の影響を示したことについて、「移入尺度」の考察も併せると、次のような解釈が考えられる。「移入尺度」においては「協力構造」が記述されることが、移入の度合いを低減させるという可能性について指摘を行った。ここで、「移入度」が向上すると、「関心向上性」が向上するということが高橋ら⁵⁹⁾によって指摘されている。以上のことから、「協力構造」により、移入の度合いが低減し、その結果、協力構造が記載されている文章の「関心向上性」が相対的に低減したという可能性が考えられる。

d) 従属変数を「自我関与性」とした回帰分析

従属変数を「自我関与性」とした回帰分析を行った結果を以下に示す。なお、「固有名詞(非公的個人)主語の文の有無ダミー」、「発話主が「固有名詞(非公的個人)」である発話の有無ダミー」の共線性の統計量VIF(分散拡大係数)は、それぞれ2.238, 2.242となり、多重共線性がある疑いが確認されたので、「発話主が「固有名詞(非公的個人)」である発話の有無ダミー」ならびに、「発話主が「固有名詞(非公的個人)」である発話の有無ダミー」との間に相関係数0.936を示す「発話主が「固有名詞(非公的個人)」である発話の割合」を分析より除外した。

従属変数を「自我関与性」とした回帰分析を行った結果を以下に示す。

「自我関与性」に対しては、「物語感得力」、「社会問題への関心全般」、「物語共有傾向」、「テーマダミー04」、「固有名詞(非公的個人)主語の文の有無ダミー」、「個人主語の文の有無ダミー」、「要素文における個人主語の文の割合」に有意なパラメータが検出され

た(表-19)．自由度調整済み決定係数 R^2 は 0.214 となった。

それぞれの標準回帰係数について見てみると、「物語感得力」(標準回帰係数: 0.136)、「社会問題への関心全般」(標準回帰係数: 0.178)、「物語共有傾向」(標準回帰係数: 0.212)、「テーマダミー04」(標準回帰係数: 0.151)、「固有名詞(非公的個人)主語の文の有無ダミー」(標準回帰係数: 0.099)、「個人主語の文の有無ダミー」(標準回帰係数: 0.101)に正の有意なパラメータが検出された。「要素文における個人主語の文の割合」(標準回帰係数: -0.084)には負の有意なパラメータが検出された。

次に、「自我関与性」に対して有意になった各変数について考察を加える。

まず、読者のパーソナリティに関する項目では、「物語感得力」、「物語共有傾向」、「社会問題への関心全般」が正の影響を与えているのが確認された。

「物語感得力」は、「他人を物語モードに入らせる上手さについての能力や傾向」を表している。この能力が高い人は、新聞記事に触れた際に新聞に含まれる物語性を感じ取りやすく物語モードに容易に入り込むということが考えられる。そして、物語モードに突入した読者は、新聞記事のトピックに対して臨場感や迫真性を感じ取り、「自我関与性」が高まったという可能性が考えられる。

「物語共有傾向」は、「他人と一緒に物語モードに浸ることで社会関係をうまく構築していく能力や傾向」を表している。出来事を物語的に共有するためには、語り手自身が物語モードに入る必要があるものと考えられる。そして、物語モードに突入した語り手が出来事の臨場感や迫真性を感じ取ったことで、「自我関与性」が高まったという可能性が考えられる。

「社会問題への関心全般」についての考察を行う。

「社会問題への関心全般」は、社会問題全般への関心の高さを表しており、そこには社会問題に対する当事者意識も含まれてくるものと考えられる。それゆえ、必然的に「自我関与性」に対して「社会問題への関心全般」が正の影響を示した、という可能性が考えられる。

新聞記事の性質に関する項目では、「自我関与性」に対して「テーマダミー04」、「固有名詞(非公的個人)主語の文の有無ダミー」、「個人主語の文の有無ダミー」に正の影響が、「要素文における個人主語の文の割合」に負の影響がそれぞれ確認された。「テーマダミー04」に正の影響が確認されたことについては、次のような解釈が考えられる。上述のように、日本に生活する読者は、地震や台風といった災害の実体験を有しているものであると考えられる。そして、地震や台風は日本各地どこでも発生しうる災害であり、それゆえ、「事故・災害」をテーマとする新聞記事に対する「自我関与性」が高くな

ったという可能性が考えられる。

「固有名詞(非公的個人)主語の文の有無ダミー」および「個人主語の文の有無ダミー」に正の影響が確認されたことについては、次のように考えられる。個人が主語となる文では、読者が新聞記事を読む際の視点を記事に描かれている個人の視点に重ねることができ、そのことから、新聞記事に描かれている出来事を当事者意識を持って捉えることができるようになった、という可能性が考えられる。特に非公的個人の場合に「自我関与性」が高まる理由としては、以下のことが考えられる。今回収集した新聞記事で扱われている公的個人は主に政治家であり、比較的その顔を思い浮かべやすい半面、イメージが固定されやすいということが考えられる。一方で、非公的個人は政治家に比べ人物像が抽象的であるため、読者が出来事を捉える視点を獲得しやすかったということが考えられる。

「要素文における個人主語の文の割合」が負の影響を示した理由としては、新聞記事はその性質上、非公的個人に比べ政治家に代表される公的個人の登場割合が多く、上述のような理由から読者が当事者意識を感じづらくなったという可能性が考えられる。

5. 総合考察

(1) 物語型コミュニケーションの有効性の生態学的妥当性の確認

以下では、回帰分析の結果を踏まえ、本研究の目的である、物語型コミュニケーションが人々の関心や納得感を高めるために有効であるとの知見の生態学的妥当性の確認を行う。まず、文書属性について考察を行う。各従属変数に有意な正の影響を及ぼしていた変数として共通のものは、「テーマダミー04」であり、このことから、災害に関連する新聞記事はその書き方に関わらず人々の関心や納得感や当事者意識を高める効果を有している、ということが示された。次に、「協力構造の有無ダミー」が「移入尺度」および「関心向上性」に負の影響を与えていた。このことから、協力構造が描かれた文章はそうでない文章に比べ、移入度を低減させ、関心も向上しづらいということが示された。次に、「『演劇的役割付与人物』登場文割合」が「納得性」に正の影響を与えることが示された。このことから、「地域のリーダー的存在」「ダークホース的存在」といった登場人物に演劇的な役割が併記されていた場合、納得感が高まるということが示された。次に、「個人主語の文の有無ダミー」と「固有名詞(非公的個人)主語の文の有無ダミー」が「自我関与性」に対して正の影響が確認されたことから、主語が個人である文が多く含まれる文章ではそうでない文章に比べ当事者意識が高まり、さらにその個人が固有名詞

の非公的個人であればより当事者意識が高まる、ということが示された。最後に、「要素文における個人主語の文の割合」が「自我関与性」に負の影響を与えることから、主語が個人である節が多く含まれることで当事者意識が薄れるということが示された。

「『演劇的役割付与人物』登場文割合」が「納得性」に正の影響を与えたことが示されたことについて、次のような解釈が考えられる。物語の典型的な一形式に「英雄物語」というものがあり、これは使命を帯びた主人公が困難に立ち向かいそれを解決する、というプロットの事を指している。このプロットの主人公は「英雄」という演劇的な役割を付与されているという風にみなすことができる。これは一つの例に過ぎないが、このように物語においては演劇的な役割を付与された人物を中心に出来事が描写されることが多く、演劇的な役割は物語性の要素の一つであるということが考えられる。そして、演劇的な役割を文に明記することで、その文章の物語性がより強まるという可能性が考えられる。このことから、「『演劇的役割付与人物』登場文割合」が「納得性」に正の影響を与えることが示されたということは、物語性の強い文章の方がそうでない文章に比べ「納得感」を向上させる可能性があることを示唆しており、このことから、物語型コミュニケーションが人々の納得感を高める上で有効であるとの知見の生態学的妥当性が支持されたものと考えられる。

次に、「個人主語の文の有無ダミー」と「固有名詞（非公的個人）主語の文の有無ダミー」が「自我関与性」に対して正の影響を与えることが示されたこと、さらに、「要素文における個人主語の文の割合」が「自我関与性」に負の影響を与えることについて、次のような解釈が考えられる。既往研究において、物語の特徴の一つとして登場人物が描かれていることが示唆されている。例えば、Green & Donahue⁵⁰⁾は、物語の特徴を、因果的なつながりで結びつけられた複数の出来事と登場人物とを提示するもの、と指摘している。また、物語の特徴に関する別の指摘として、文章が人々の意思を中心に展開されることが挙げられる⁸⁾。この他にも、上述の「英雄物語」のようなプロットが物語の典型的な一形式であるとの指摘があり⁶⁾、このようなプロットに沿って文章を構成するためには、当然ながら登場人物を描く必要が出てくるものと考えられる。このように既往研究において、物語の特徴として登場人物の存在を指摘しているものが複数存在し、登場人物を文章に描くためには、当然個人を主語とする文を登場させる必要が出てくるものと考えられる。以上のことから、個人が主語の文がある新聞記事の方が、そうでない新聞記事に比べ物語性を帯びているということが考えられる。なお、「要素文における個人主語の文の割合」が「自我関与性」に負の影響を与えているはい

るが、「個人主語の文の有無ダミー」と標準化係数を比較してみると、 -0.084 と 0.101 となり、個人主語の文が存在すればそれだけで「自我関与性」に正の影響を及ぼすことが示されている。

以上をまとめると、物語性の要素として登場人物が重要であることが既往研究において指摘されており、登場人物を描くためには、主語が個人となる文を描く必要が伴うものと考えられる。そして、「個人主語の文の有無ダミー」と「固有名詞（非公的個人）主語の文の有無ダミー」が「自我関与性」に対して正の影響を与えることが示されたので、このことから、物語型コミュニケーションが人々の当事者意識を高める上で有効であるとの知見の生態学的妥当性が支持されたものと考えられる。

最後に、物語志向性がそれぞれの従属変数に正の影響を及ぼすことに関する考察を行う。「移入尺度」に対しては「物語共有傾向」が、「納得性」に対しては「物語感得力」が、「関心向上性」に対しては「物語共有傾向」と「物語誘引力」が、「自我関与性」に対しては「物語感得力」と「物語共有傾向」が、それぞれ正の影響を与えていることが示された。既往研究においては、物語志向性が高い人はそうでない人に比べ、文章に触れた際に移入度や読了効果が高まりやすいということが示されている⁵¹⁾。そして、本研究の実験結果は、物語志向性の下位尺度に違いはあるが、全体の傾向として、物語志向性が高い人の方が高い移入度や読了効果を示すというものであり、この結果も、物語型コミュニケーションに関する知見の生態学的妥当性を支持するものであると考えられる。

(2) 物語性評価における課題

本研究で行った文章の物語性の定量的な評価は、極めて先行的であり、また探索的な試みであったため、評価の際には様々な課題が残された。以下では、その課題について述べることにする。

a) 物語性の評価枠組みの構築に関する課題

まず、今回の実験では、回帰分析によって得られた決定係数はいずれも 0.200 から 0.300 の間にあり決して高い数値とはいえないものであった。このことから、移入度や読了効果に重要な影響を与える重要な要因が、本研究で採用した説明変数以外に存在していることは否定できず、今回用いた評価項目のみでは物語性を十分に定量化できていないという可能性が考えられる。

物語性を十分に捉えるための評価項目の枠組みを構築するためには、物語の概念を予め明瞭にしておく必要があるものと考えられる。しかし、現時点の物語研究においては、物語という概念そのものが曖昧であり、統一的な定義が存在していないという問題があった。そのため、本実験では探索的なアプローチで、物語的な特徴付けを

行うために必要であると考えられる評価項目を、いくつか採用している。その評価項目として、例えば、「擬人法」や「価値判断」に関する評価項目などが、該当するものと考えられる。しかし、本実験で用いた変数の中には有意にならなかったものや、「協力構造」のように本来想定していたのとは逆向きの影響を与える可能性が示されたものなどがあった。これらについても、コーディング作業が厳密に行えていたのか、あるいは、物語性の評価基準として適切であったか、など吟味する必要があるものと考えられる。

さらに、本実験においては便宜上要素還元的に文単位での物語性評価を行うに留まった。しかし、この評価方法では物語の要素として重要であると考えられる文章の脈略や筋書きといったものを十分にモデル化・定量化できない、という可能性が考えられる。以上のことから、「物語的な文章」特徴を明瞭化する研究や、物語性を評価する際の枠組みに関する研究の今後の充実が俟たれることになる。

b) コーディング作業に関する課題

仮に「物語的な文章」の特徴が概念として明瞭に規定されたとしても、それを定量的に評価するためのコーディングが容易であるとは限らない。今回の実験で行ったコーディング作業においても、問題点としては次の2つが挙げられる。

1 つ目は、コーディング作業から主観性を完全に排除できないという問題である。今回のコーディングにおいては、複数人で作業を行うことで客観性を担保している。もちろん、複数人で作業を行うことで、単独の評価者が作業を行う場合に比べ、ある程度の客観性が確保されているとは考えられるが、評価項目の性質としてどうしても主観的評価に頼らざるを得ないものが出てくるという課題が残った。例えば、「不確実な将来に関する時間体験」の有無の判断は、評価者が、当該文章が「不確実な将来に関する時間体験」に該当するかどうかということを中心に主観的に判断するというものであった。このように、コーディング作業において、評価者の主観的な評価に頼らざるを得ない部分が生じており、その主観性を完全に排除することは難しいという問題があった。

2 つ目は、コーディングにおける主語や動詞の分類に明確な基準を設けられなかったことである。今回のコーディング作業においては、主語の種類や動詞に関する分類を行っている。その際に、なるべく統一的な基準に基づいて行えるように最大限の配慮を行った。しかし、そのような配慮を行ったとしても、評価者の捉え方によって分類が異なるものは一定数存在した。そのような分類が困難なものについては、その都度新たな分類基準を設けるなどの対策のもとに分類を行っている。ただし、このような分類基準はコーディングを行う評価者によって

変動しうるものであり、本研究の分類が最善でない可能性については十分念頭に置く必要がある。

これらの課題はいずれも、文章を文法的役割ではなく「意味」によってコーディングするという方法論上、避けがたいものであるとは言える。結果を慎重に解釈しつつ、今後こうした研究を積み重ねることで、少しずつ基準を明確化していくことが必要である。

(3) 物語型コミュニケーションの応用に向けた考察

本研究では、物語型コミュニケーションの有効性に関する生態学的妥当性を検証するために、実際に社会で用いられている文章である新聞記事を実験材料として用いて実験を行った。その結果、物語型コミュニケーションが人々の納得感や当事者意識を高めるという可能性が示され、生態学的妥当性が確認された。このことから、新聞記事のような社会的な出来事を伝達するための文字媒体でも物語型コミュニケーションが有効であると考えられるため、次のような応用の仕方を提言できる。例えば、公共事業に関する住民説明の際に、政府や自治体が発行する資料やパンフレットなどを物語的に記載するという方法（例えば、時間軸に沿って登場人物を明確にしながら具体的エピソードを描写するような記述を活用する）が考えられる。その場合、人々の納得感や当事者意識が高まることが期待され、より円滑な合意形成を行うことが可能になると考えられる。

ただし、物語型コミュニケーションを実践に用いるためには次のような課題があると考えられる。まず、今回の実験では新聞記事を用いているが、物語型コミュニケーションの有効性の一般化可能性を検証するためには、この他様々な媒体で検証する必要があるものと考えられる。例えば、文字媒体に限らず映像データや音声データなど多岐にわたるメディアを用いた場合に、物語型コミュニケーションの有効性が確認されるか、あるいは確認されないか、までも含めて検証を行っていくことが求められることになると思われる。

次に、5.(2)で触れたように、物語の特徴をより明瞭化するためにも、物語とは何か、という根源的な更なる研究が必要であるということが考えられる。

さらに、今回の実験では、物語志向性や社会問題への関心の程度など読者のパーソナリティが読了効果に影響を及ぼしている可能性が示唆されている。ただし、個人の物語志向性を醸成する方法などについては、これまで十分に研究がなされていない。物語型コミュニケーションを実践でより有効に活用するには、このようなパーソナリティに着目した研究の蓄積も俟たれることになる。

参考文献

- 1) 秋吉貴雄, 伊藤修一郎, 北山俊哉: 公共政策学の基

- 礎, 有斐閣ブックス, 有斐閣, 2010.
- 2) 土木学会誌編集委員会 編: 合意形成 総論賛成・各論反対のジレンマ, 社団法人土木学会, 2004.
 - 3) 菅野雄介: ハツ場ダムとは, 2016/11/20 アクセス, <http://www.asahi.com/topics/ハツ場ダム.php>
 - 4) 藤井聡: 社会的ジレンマのための処方箋・都市・交通・環境問題のための心理学, ナカニシヤ出版, 2003.
 - 5) 川端祐一郎, 浅井健司, 宮川愛由, 藤井聡: 物語型コミュニケーションが公共政策に関する態度に与える影響の研究, 土木学会論文集 D3 (土木計画学), Vol. 72, No. 5, pp. I_213-I_230, 2016.
 - 6) 高橋祐貴, 川端祐一郎, 宮川愛由, 藤井聡: 政策情報の物語化が受け手の態度変容に与える効果に関する実証的研究, 平成 27 年度土木学会全国大会 第 70 回年次学術講演会, 2015.
 - 7) 川端祐一郎, 藤井聡: コミュニケーション形式としての物語に関する研究の系譜と公共政策におけるその活用可能性, 土木学会論文集 D3 (土木計画学), Vol. 70, No. 5, pp. I_123-I_142, 2014.
 - 8) Bruner, J.: *Actual Minds, Possible Worlds*, Boston: Harvard University Press, 1986. (ブルーナー, J. (田中一彦訳): 可能世界の心理, みすず書房, 1998.)
 - 9) Green, M. C. and Brock, T. C.: The role of transportation in the persuasiveness of public narratives, *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol. 79, No. 5, pp. 701-721, Nov 2000.
 - 10) 長谷川大貴, 中野剛史, 藤井聡: 土木計画における物語の役割に関する研究(その 1)—プランニング組織支援における物語の役割—, 土木計画学研究・講演集, CD-ROM, Vol. 43, 2011.
 - 11) 野口裕二 編: ナラティブ・アプローチ, 勁草書房, 2009.
 - 12) Beaugrande, R. D.: The story of grammars and the grammar of stories, *Journal of Pragmatics*, Vol. 6, Issues 5-6, pp. 383-422, December 1982.
 - 13) Labov, W. and Waletzky, J.: Narrative analysis : oral versions of personal experience, *Journal of Narrative & Life History*, Vol. 7, No. 1-4, pp. 3-38, 1997 (original: 1968).
 - 14) アリストテレス, ホラーティウス (松本仁助, 岡道男 訳) : 詩学 詩論, 岩波書店, 1997.
 - 15) やまだようこ 編著: 人生を物語る—生成のライフストーリー, ミネルヴァ書房, 2000.
 - 16) Hinchman, L. P. and Hinchman, S. K.: Introduction, In Hinchman, L. P. and Hinchman, S. K. (eds.), *Memory, Identity, Community : The Idea of Narrative in the Human Sciences*, New York : State University of New York, 1997.
 - 17) Labov, W. and Waletzky, J.: Narrative analysis : oral versions of personal experience, *Journal of Narrative & Life History*, Vol. 7, No. 1-4, pp. 3-38, 1997 (original: 1968).
 - 18) Thorndyke, P. W.: Cognitive structures in comprehension and memory of narrative discourse, *Cognitive Psychology*, Vol. 9, Issue 1, pp. 77-110, 1977.
 - 19) Propp, V. (Author), Wagner, L. A. (Editor), Scott, L. (Translator): *Morphology of the Folktale*, 2nd edition, Amazon Kindle edition, Austin : University of Texas Press, 2010 (original: 1927).
 - 20) Joseph Campbell (平田武靖・浅輪幸夫 監訳) : 千の顔をもつ英雄, 人文書院, 1984.
 - 21) 箱田裕司, 都築誉史, 川畑秀明, 萩原滋: 認知心理学, 有斐閣, 2010.
 - 22) Kintsch, W.: Text comprehension, memory, and learning, *American Psychologist*, Vol. 49, No. 4, pp. 294-303, 1994.
 - 23) Zwaan, R. A.: The immersed experienter Toward an embodied theory of language comprehension, In Ross, B. H. (Ed.) *The Psychology of Learning and Motivation : Advances in Research and Theory*, Vol. 44, Elsevier Academic Press, pp. 35-62, 2004.
 - 24) Zwaan, R. A. and Radvansky, G. A.: Situation models in language comprehension and memory, *Psychological Bulletin*, Vol. 123, pp. 162-185, 1998.
 - 25) León, J. A. and Peñalba, G. E.: Understanding causality and temporal sequences in scientific discourse, In J. Otero, J. A. León, A. C. Graesser (eds.), *The Psychology of Scientific Text Comprehension*, Mahwah, NJ : Lawrence Erlbaum Associates, pp. 155-178, 2002.
 - 26) 井関龍太, 川崎恵里子: 物語文と説明文の状況モデルはどのように異なるか: 5 つの状況的次元に基づく比較, 教育心理学研究, Vol. 54, No. 4, pp. 464-475, 2006.
 - 27) Zwaan, R. A., Magliano, J. P. and Graesser, A. C.: Dimensions of situation model construction in narrative comprehension, *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, Vol. 21, No. 2, pp. 386-397, 1995.
 - 28) Zwaan, R. A. and Brown, C. M.: The influence of language proficiency and comprehension skill on situation-model construction, *Discourse Processes*, pp. 289-327, 1996.
 - 29) Schank, R. C. and Abelson, R. P.: Knowledge and memory the real story, In Wyer, R. S. Jr. (eds.) *Knowledge and Memory: The Real Story*, Hillsdale, NJ. Lawrence Erlbaum Associates, pp. 1-85, 1995.
 - 30) 浅野智彦: 自己への物語論的接近家族療法から社会学へ, 勁草書房, 2001.
 - 31) Gergen, K. J. and Gergen, M. M.: Narratives of the self, In Sabin, T. R., Scheibe, K. E. (Eds.), *Studies in Social Identity*, Praeger, 1983.
 - 32) Ricoeur, P.: *Soi-même comme un autre*, Seuil, 1990. (ポール・リクール, 久米博 訳: 他者のような自己自身, 法政大学出版局, 1996.)
 - 33) Elliot, J.: *Using Narrative in Social Research: Qualitative and Quantitative Approaches*, Amazon Kindle edition, London : Sage Publications, 2005.
 - 34) Bruner, J.: *Acts of Meaning*, Harvard University Press, 1990. (岡本夏木, 仲渡一美, 吉村啓子 訳: 意味の復権 フォークサイコロジーに向けて, ミネルヴァ書房, 1999.)
 - 35) Ricoeur, P.: *Temps et Récit I : Temps et Récit*, Seuil, 1983. (ポール・リクール, 久米博 訳: 時間と物語 (1) 物語と時間性の循環 歴史と物語, 新曜社, 1987.)
 - 36) 田中里奈, 清水光弘, 金光義弘: 幼児期における他者視点取得能力の発達と社会性との関連, 川崎医療福祉学会誌, Vol. 23, No. 1, pp. 59-67, 2013.
 - 37) Green, M. C.: Transportation into narrative worlds: The role of prior knowledge and perceived realism, *Discourse Processes*, Vol. 38, pp. 247-266, 2004.
 - 38) Green, M. C., Brock, T. C. and Kaufman, G. F.: Understanding media enjoyment: The role of transportation into

- narrative worlds, *Communication Theory*, Vol. 14, pp. 311-327, 2004.
- 39) Dal Cin, S., Zanna, M. P. and Fong, G. T.: Narrative persuasion and overcoming resistance, In Knowles, E. S. and Linn, J. A. (Eds.), *Resistance and Persuasion*, Lawrence Erlbaum Associates, pp. 175-192, 2004.
- 40) McNamee, S. and Gergen, K. J. (Eds.): *Therapy as Social Construction*, Sage, 1992.
- 41) 斎藤清二 編：ナラティブとケア，第 1 号特集：ナラティブ・ベイスト・メディスンの展開，遠見書房，2010.
- 42) Sangalang, A., Johnson, J. M. Q. and Ciancio, K. E.: Exploring audience involvement with an interactive narrative: implications for incorporating transmedia storytelling into entertainment-education campaigns, *Critical Arts*, Vol. 27, No. 1, pp. 127-146, 2013.
- 43) Richardson, B.: It's a fix!: The mediative influence of the X Factor tribe on narrative transportation as persuasive process, *Journal of Consumer Behaviour*, Vol. 12, No. 2, pp. 122-132, 2013.
- 44) Murphy, S. T., Frank, L. B., Chatterjee, J. S. and Baezconde-Garbanati, L.: Narrative versus nonnarrative: The role of identification, transportation, and emotion in reducing health disparities, *Journal of Communication*, Vol. 63, No. 1, pp. 116-137, 2013.
- 45) 長谷川大貴，中野剛史，藤井聡：土木計画における物語の役割に関する研究(その 1)—プランニング組織支援における物語の役割—，土木計画学研究・講演集，CD-ROM, Vol. 43, 2011.
- 46) Putnam, R.: *Making Democracy Work*, Princeton University Press, 1993. (河田潤一 訳：哲学する民主主義 伝統と改革の市民的構造，NTT 出版，2001.)
- 47) 藤井聡：景観改善の「物語」とその「伝染」について，都市計画，Vol. 57, No. 6, pp. 21-24, 2008.
- 48) 夏山英樹，藤井聡：東日本大震災における「くしの歯作戦」についての物語描写研究，土木計画学研究・講演集，CD-ROM, Vol. 45, 2012.
- 49) 澤崎貴則，藤井聡，羽鳥剛史，長谷川大貴：「川越街づくり」の物語描写研究～町並み保存に向けたまちづくり実践とその解釈～，土木学会論文集 F5 (土木技術者実践)，Vol. 68, No. 1, pp. 1-15, 2012.
- 50) 佐藤翔紀，神田佑亮，藤井聡：高知県黒潮町におけるレジリエンス確保のための防災行政についての物語描写研究，実践政策学，第 1 巻 1 号，2015.
- 51) 藤井聡：意思決定における物語の役割，行動計量学会第 39 回大会抄録集，2011.
- 52) 日本 ABC 協会：新聞発行社レポート 半期，2015.
- 53) Ericsson, K. A. and Simon, H. A.: *Protocol Analysis - Verbal Reports as Data*, MIT Press, Cambridge, MA, 1984.
- 54) McAndrew, F. T.: Can gossip be good?, *Scientific American Mind*, October-November 2008.
- 55) 高橋祐貴，川端祐一郎，宮川愛由，藤井聡：物語志向性を考慮した公共政策における物語型コミュニケーション効果についての研究，土木計画学研究・講演集，CD-ROM, Vol. 52, 2015.
- 56) Green, M. C. and Donahue, J. K.: Simulated worlds: Transportation into narratives, In K. D. Markman, W. M. P. Klein and J. A. Suhr (Eds.), *Handbook of Imagination and Mental Simulation*, pp. 241-254, New York: Psychology Press, 2008.

(2018. 2. 23 受付)

AN EXPERIMENTAL STUDY ON ECOLOGICAL VALIDITY OF THE EFFECTS OF NARRATIVE-FORMED COMMUNICATION ON PEOPLE'S ATTITUDES

Yuki TAKAHASHI, Yuichiro KAWABATA, Ayu MIYAKAWA and Satoshi FUJII

Recently in Japan, there have been a lot of major problems such as deflation and large scale disasters, and various public policies are needed to solve those problems and increase people's welfare. Consensus building is indispensable for planning and implementing public policies. Previous studies have demonstrated that narrative-based communication effectively changes people's attitudes toward public policies. However, there have been only experiments in which scenarios created for specific experimental purpose are used and its ecological validity is not validated enough. In this study, we used newspaper articles as experimental stimuli because they are used in real life, and found some significant effects of narrative-formed communication on people's attitudes.